

緒言－都市研究のテンス－

小松原 尚

- I 都市の現在から過去を視る
 - 1. 新旧の地形図の比較
 - 2. 現在の景観を古写真と比較
 - 3. 現在進行形の古代都市研究
- II 日中交流の進展と都市研究
 - 1. 都市構造の変化と人的流動
 - 2. 多角化する都市研究
 - 3. サービス集積と都市
- III 都市研究の未来
 - 1. 「変貌するアジアと観光」との接続
 - 2. 「都市－過去・現在・未来」への経緯
 - 3. 都市を素材に大学教育

現在を生きるわれわれは、その暮らしを、時に過去形で語り、またある時は現在形で、そして未来形になることもある。そして、そうした人間の集まる都市もまた、多様なテンス（時制）で語られるのである。

I 都市の現在から過去を視る

1. 新旧の地形図の比較

人文地理学の講義にて、地形図の読図と都市災害への対応を扱う単元がある。テキストの該当箇所（長坂，2008：36-37）を示し、2011年3月11日に際しての浦安市内の液状化現象の説明をする。半世紀前は海底であった状況を地図上で目の当りにし、直近の図と比較することで地震災害のメカニズムの一端に気付く。

そこで、学生を引率してマップライブラリー（立命館大学文学部）を訪れ

た。実習助手の方から直接収藏品についての説明を受けた。古地図をはじめ様々な地図資料が収蔵されており、実際に手にとってみる事ができるのが魅力である。ここでは、100年以上にわたる地形図を時系列的に閲覧できる。参加者は自分の出身地の地形図を時系列的に比較しながら変化を確かめていた。

現在の地形環境を理解するためには過去の地形に立ち返って見ておくことが現在の状況把握につながることを先に学んでいたからである。学生たちは、予定時間を超過してもなお、熱心に比較観察していた。

2. 現在の景観を古写真と比較

都市そのものは現在形のものであるが、その形成過程を振り返ることで、都市の在り様を考えることにもなるのである。都市の現在と過去を画像で比較することによって現在を見つめ直すこともでき、国際交流に際してはフィールドツアーにも活用可能である。

野外活動として、入江泰吉の古都奈良の風景写真とその現状の比較を実施したことがある。入江の眼に、ファインダーを通して垣間見えた日常を、今のそれと同じ視角から重ねてみたいと考えたのである。移動とは場所の移動もあるが、同じ場所でも時間が異なればそれは、時空間の移動となる。入江泰吉をキーワードに一人の一人の時間と空間がこのツアーを通じて共有化できればとの考えである。

近年、各地域の写真集では、過去と現在の風景写真を比較する、さらに地図を添える手法での出版物は少なくない。新旧の地図と写真を併載し、今昔を重ね合わせつつ楽しめる。さらに、それらにおさめられた過去と現在の画像を比較し、そこに写し出された景観の変化を確かめつつ、その構造的背景に思いをはせるのである。

入江泰吉記念奈良市写真美術館（2011）は、入江泰吉（1905–1992）の写真集であり、編者は「入江泰吉記念奈良市写真美術館」である。その名の示すように、入江の作品群を主たる収藏品としている。この美術館は、入江が亡くなる前年に彼が、全作品（約8万点以上のフィルム）と著作権を奈良市に寄贈し、それを機に建てられたものである。

入江のこれらの作品は、カメラを絵筆のように駆使し、時には鮮やかな色彩に、またある時は水墨画の趣を出すという芸術写真である。こうした卓越した技能・才能に恵まれたればこそ、彼にしか描けないアングルや特別に許されたポイントからの映像表現が可能になったに他ならないと思う。

ただ私はそうした彼の作品に感動すればするほど、1つの疑問が膨らんでいった。それは写真のもつ記録性ということを彼はどうとらえていたのだろうかということである。そう考える理由は、近代の100年余の写真技術の発達はその記録媒体としての側面も少なくない筈だと思ふし、入江がこの点を等閑に付したとは考えにくいからである。

そして、編者の「はじめに」(入江泰吉記念奈良市写真美術館編,2011:3)にも記されているように、この写真集は、「入江泰吉は戦後から昭和30年代にかけて、……過ぎ去った時代と人々の暮らしを切り取った貴重な記録写真」の性格をもっていることを明示しているのである。

以上のように、入江の作品は、明確な意志に基づく記録であることがわかった。したがって、同じ撮影地点からの追体験が可能になる。そして、戦後の入江泰吉の作品の出発点が、奈良の風景であったとすれば、入江の撮影した半世紀前と現在との比較は意味のあることと思う。

だから、当写真集はフィールドツアーなど、教育への活用の可能性は大きい。新旧の写真を比較しつつ、変わらぬ理由、変化の背景を考えることは、その背景にある地域構造研究や産業の立地を分析する際にも役立つ。ありふれた日常の今の昔を振り返るといふ、ありふれた活動にとってはありがたい一冊である(小松原, 2013)。

3. 現在進行形の古代都市研究

古都奈良に研究の拠点を置くわれわれにとって、その都市としての形成プロセスやメカニズムには少なからず関心がある。しかし、1300年前の都は地中にあり、目の当りにはできないので、埋蔵文化財の発掘調査やその検討の成果を待つしかない。こうした状況の中で、その研究の進展に大きく関わったのは、関西の大都市圏を構成する奈良盆地北部の地域開発であった。

圏域の機能連携を強化するためのインフラストラクチャーの整備の一環と

して、国道24号線のバイパス工事にともない、周辺地域の埋蔵文化財調査が行われたのである。その結果は、古墳、奈良時代の居住地、東三坊大路とその側溝の3点に集約され、報告書にまとめられている（町田章ほか、1975）。その報告書によると「木簡によれば、710年代から720年代にかけての頃、この地には……親王級の宅地が存在……長屋王はその有力な候補」（町田ほか、1975：163）と指摘している。このことは古代都市の中枢管理機能地域の一部が、この研究調査活動の成果によって浮彫りになったことを提示しているのである。

上記の一連の調査活動の主要メンバーの一人でもある田辺征夫は、その成果を踏まえながら、古代の都市形成に関する論考を公にしている。その一つは古代都市奈良・平城京の形成要因に関する検討である。国内事情と国際関係の両側面から考察し、結果を次の3点に整理している（田辺、2010a：5-8）。①平城京域の地形的要因、②官僚掌握のためのシステム整備、そして③東アジアの国々との国際関係にある。

もう一つは平城京の都市景観に関することである（田辺、2010b：78-79）。即ち、街区そのものは直線を基調に、低層建築物がならび、大路側に門を開けられないため扁平で無機的な街並みを想定している。ただし、田辺も指摘しているように、平城京の都市研究成果は「宮域の約30%終了することによって得られたものである。しかし、平城京域に目を向ければ、まだ、3%程度しか発掘されていない」（田辺、2010b：80）のである。今後の発掘成果次第では従来とは異なった都市景観も明らかになる可能性もある。古代都市研究はまさに現在進行形である。

Ⅱ 日中交流の進展と都市研究

本学と上海師範大学旅遊学院とは2009年4月以来、学術交流を深めている。その間に何回かの研究交流の場をもった。以下に、その経緯をたどりつつ、両大学相互の都市にかかわる研究の深化を跡付けておきたい。

1. 都市構造の変化と人的流動

(1) 中日観光地理研究会

上海師範大学旅遊学院との交流が始まって1年余りが経過した2010年10月、上海師範大学において標記の研究会を開催した。この間、両大学の間で学术交流協定の準備を進めており、それに先立ち、両大学でそれぞれ研究活動に従事し、学問的に専門分野も似通っている2人がそれぞれ研究発表を行なった。

まず、上海師範大学旅遊学院からは、王承云が「世界博覧会と上海経済社会」をテーマとする発表をした。中国・上海市における経済成長を跡付けながら、都市域の産業構造の転換のなかで、重厚長大部門である鉄鋼や造船といった業種が市街地から移転した跡地利用としての世界博が位置付けられることを明らかにした。また、都市発展にとって交通網の整備は不可欠であり、その進展状況も明示された。ただ、こうした交通インフラの整備と上海市の都市機能強化戦略との関連は、世界博跡地利用の未だ不明な点もあり、今後の課題となった。

奈良県立大学からは、小松原尚が、「最近の日本の観光研究の動向について－人文地理学における観光客流動研究を中心に－」をテーマにこれまで発表者が継続的に取組んできた、人的流動構造の中での観光客流動の位置づけについて論じた。特に、都市への集中・集積の深化がもたらす都市住民の意識・関心の変化に注目し、観光行動の起因となる要素の分析の必要性を論じた。

この研究会は、今後の両大学の研究交流の門戸を開くという意味でも重要であった。2010年10月の奈良県立大学におけるシンポジウムでの新たなる展開が期待された。

(2)「中国上海市における観光戦略とアジア」をテーマに調査活動

2010年10月の上海研究旅行は上海市内における調査活動を実施することも目的にあった。その中で、① 博覧会開催が市内の旧来の観光地の利用者の動向に影響しているのかどうかということである。上海の歴史的観光地の1つである豫園と近隣の商業集積を見学した限りではその賑わいは変わりなかった。また、その一角に観光案内所が設置されており、ボランティアの活動拠点、様々な観光情報の提供、携帯の充電機器も設置されていた。また、市内の市場（いちば）の見学では、世界博とはほとんど無縁な旧来の物流形

態が続いていること、そして淡々とした市民の暮らしの息吹を感じた。② 上海世界博では、上記の王報告の中で環境対策に関する論及があった。現地にてその状況を観察した。まず、バスの一部に電動機を動力源としたものが利用されていた。充電は会場内のバス停に充電用のレールが設置され、停車の度にバスの屋根に取り付けられたパンタグラフによって集電している。また、暑さ対策には天井から水霧の散布が行われていた。③ 市内の国営旅行会社での聞き取りによると、中国では休日の分散政策を2007年より実施しており、国内の旅行・観光行動にもその成果が現れているとの説明があった。折りしも、日本の休日分散に関しては否定的な調査結果が発表されたばかりなので、その対照が印象的であった。そして、観光行動にはその国の制度など社会環境が大きく影響していることを再認識させられた。

2. 多角化する都市研究

(1) 上海師範大学「中日人文地理・観光研究所」設立記念セミナー

2011年3月、上海師範大学にて、「中日人文地理・観光研究所」の設立に伴い、その記念行事として開催された。この国際会議においても都市に関する講演が幾つかなされた。例えば、北京大学教授・李国平は中国における大都市の発展に関する比較研究の成果を講じ、上海師範大学教授・林涛は高速道路沿線の都市機能の差異に関しての知見を述べた。また、東洋大学教授・藤井敏信は台北市の混住環境に関する実態調査の結果を発表した。

そして、小松原は「日本における産業の立地と観光」をテーマとしてわが国の産業の構造変化に伴う産業都市と観光とのかわりを大きく3つの観点から論じた。1つは産業用地の用途転換と都市の再生、2つ目は都市における産業近代化遺産の観光的利用、それから、3つ目として現在操業している工場を対象とした都市観光である。

(2) 中日人文地理観光研究所の今後の発展に関する会議

開設式典翌日の午前中から、上海師範大学旅遊学院国際会議室にて、人文地理観光研究所の最初の会議が持たれた。出席者は上海師範大学からは、旅遊学院副院長・高峻、地理系教授・王承云、外事専門職員（通訳）・幹清華の3名、日本からは、奈良県立大学学長・伊藤忠通、東洋大学教授・藤井敏

信、同・梁春香、立命館大学教養教育センター長・藤巻正己、赤羽孝之・上越教育大学教授、そして小松原であった。

王からは、都市としての上海市の抱える問題点として、農村からの人口流入に伴う無戸籍者の問題があげられた。経済が発展すればするほどにこうした都市部における底辺層への対応が、社会の安定化に向けて重要度を増してくる。このような定住人口の構造的把握とそのための課題設定、さらに観光を含む都市交流人口の量的質的把握も並行して検討課題となることが確認された。都市研究の裾野の広がりを感じさせる会議であった。

3. サービス集積と都市

(1) 「日本と中国の観光交流研究」に関する共同研究会

2012年12月、日本と中国の観光交流研究に関する学術交流を図り、両国の観光交流研究の相互理解と発展に資し、もって両国の観光交流の促進に寄与することを目的に標記の研究会をもった。奈良県立大学教授・西田正憲、同・遠藤英樹が、上海師範大学からは、教授・王承云と同・張文建がそれぞれ研究発表を行った。

「日本のサブカルチャー観光と訪日中国人観光客」をテーマとする遠藤は発表において、多くの中国の人びとが日本の観光地、特に大都市に注目していると指摘した。日本におけるいくつかの観光地、特に大都市圏のそれは、アニメ、マンガ、テレビドラマ、映画、ポピュラーミュージック、ゲーム等のポピュラーカルチャーの影響が大きい。さらにそれらは、ポピュラーミュージックとの相互依存関係が強いことも披露された。

観光行動においてはヒト、モノ、カネ、情報の交流を促進する。その結果、ポピュラーカルチャーは大きく再形成され、再構築されていくのである。その過程の中で都市へのサービスの集中・集積が進行していく。

次に、張は「上海博覧会の視点から見る社会公共サービスの提供に関して」と題する報告において、上海博覧会の視点から見る社会公共サービスの提供に関して「2010年世界万国博覧会」では、中国のサービス業の発展に新しい歴史的な契機を作り出したと指摘する。「中国服務」は、高品質で中国型サービスの形態とモデルを代表するものとして、上海万博での経験はそのモデル

ケースとなりうる。この観点から、報告では上海万博における公共サービスの提供が、人的陶冶によって質的に向上したことを指摘している。

そして、王は、「中国における日系企業の立地変化—上海を事例として—」を表題として、2010年における中国のGDP総額が日本を抜いて世界第2位となる中、日系企業の中国における事業展開も、従来の「製造拠点」と「輸出拠点」としての展開から、「中国市場販売」と「研究開発拠点」としての展開へと加速に移行しつつある。中国、中でも上海及び周辺における日系企業の立地状況を明らかにし、企業支援サービスの在り様について論じた。

(2) 中・日城市旅遊経済国際研究会

2013年3月、上海師範大学会議センターにて開催された。中日人文地理観光研究所の設立をみて、2年を経た第2回シンポジウムとしての位置づけもあった。

講演の表題を以下に示すと、京都教育大学教授・香川貴志は、「成熟社会における新しいツーリズムの提案—日常生活空間のバリアフリー対応を観察する—」、立命館大学教授・藤巻正己は、「『観光的社会』日本の新しい観光現象」小松原は「奈良県からみた新しい観光の動向」、愛知大学教授・蔣湧は「東三河の防災をパソコンの画面で読み解く～GIS（地理情報システム）の活用法」であった。

「高齢化社会」、「災害防災」、「情報発信」をキーワードに「新しい観光」という括りで講演と議論が進行した。香川はオールドタウン化する住環境を踏まえつつその問題点を観光に敷衍して論を展開した。都市における日常生活の高齢者への対応と重ね合わせつつ、観光サービスの質的向上の課題に関して論じた。また、藤巻は震災の悲惨さと観光資源としての希少性との関係性を試論的に述べ、震災からの都市の復興における観光サービスの位置づけを述べた。そして、小松原は奈良県からの訪日外国人に対する観光情報提供の現状と問題点を指摘した。最後に蔣は地理情報システムを防災に適用した事例紹介をするとともにその普及に際しての課題を考察した。

フロアからの質問も活発になされた。ゲストコメンテータである華東師範大学教授・谷人旭や同・曾剛からは香川の講演に関して、少子高齢化社会

の捉え方に関する議論がなされた。また、小松原の講演に関しては、大学院生より、奈良県における旧来型の観光資源の賦存状況とその利活用の現状に関しての質問が寄せられた。奈良県のもつ「インターナショナルレベル」の価値を再認識させられると同時に、近畿大都市圏の一部を構成する奈良市の都市的側面に対する理解、そのための情報発信の工夫の必要性を感じた。

(3) 上海市内および大都市圏域の現地調査

上記セミナーの開催前、午前中に香川が都市再開発と旧開地域の持続的発展に関して、上海を事例に調査を重ねられているので、小松原も同行させていただいた。「田子坊」は、わが国にあっても、中心市街地の活性化と歴史的町並みの利活用に関心があるので恰好の機会であった。

セミナーの翌日、アジア有数の1千万を有する大都市圏の中心都市である上海市の南方の膠州湾岸地域の自然と人文観光資源に関する現地調査に参加した。紹興酒の酒造場をイメージし、その展示・販売を目的とした産業観光施設である「中国黄酒博物館」の見学など、盛りだくさんの内容のフィールドトリップであった。

Ⅲ 都市研究の未来

1. 「変貌するアジアと観光」との接続

奈良県立大学と上海師範大学との学術交流の成果を都市研究の観点から整理するとこれまで述べたようになる。そして都市を対象とした今回の特集は、上海師範大学中日人文地理・観光研究所と奈良県立大学との共同研究成果としても位置付けられるものであり、2012年1月に刊行されたものに続く2冊目となる。

そして、前回の特集号「変貌するアジアと観光」（奈良県立大学研究季報22-2）においても都市研究に関する成果は少なくない。その特徴を示すと、大きく3つの観点に整理できる。まず、第一に、都市における産業の立地・配置と人的流動に関するものである。第二に戦間期の都市からの観光客の行動分析やその観光対象の形成過程の研究である。そして、第三に都市における景観形成に関する研究である。「なぜそこにそれがあるのか」という問い

に対して、社会的文化的因果関係から解を求めるものである。

例えば、第一の観点では、小松原（2012）が、都市における素材型産業の衰退によって生じた遊休・未利用地の用地用途創造のための大型観光関連施設（テーマパークなど）の立地展開、近年関心の高まった産業遺産の観光利用、そして現在操業中の工場の観光素材としての利用形態について研究動向を探った。

次に第二の観点については、千住一（2012）が戦間期における観光研究動向を台湾、朝鮮、旧満州に関して整理している。この時期における日本植民地における観光現象を「様々な主体による多方向への人間の移動」と表している。千住の指摘したこの人的流動こそが大戦間期における都市の膨張によってもたらされたものと考えられよう。千住は2014年度より実施の新しい教育課程において、「都市交流史」および「都市表象論」の講義を担当することになっており、その意味においても今後の都市論の展開を期待できる。

最後に第三の観点については、井原縁（2012）がアジアで初めての国際園芸博となった1990年「大阪国際花と緑の博覧会」を事例に、都市景観の形成における博覧会の役割に関して論じている。博覧会開催前後のランドスケープの変貌（特に自然環境の変化）に表れる自然観に焦点を当て考察し、博覧会で意識されていた自然は理想的な都市環境を醸し出すものであり、都市生活における多様かつ貴重な文化的活動の場を提供するものであったことを明らかにしている。

2. 「都市—過去・現在・未来」への経緯

今号の特集企画は、立命館大学文学部客員教授として滞在中の王との研究打合せ会（2013年12月）の席上で提案されたことに始まる。これは、奈良県立大学と上海師範大学旅遊学院との交流が始まって満5周年を経過し、両大学間の研究交流の成果を都市研究の観点から確認するものである。そして本号も、上海師範大学中日人文地理・観光研究所と奈良県立大学との共同研究の成果としても位置付けられるものである。

この本号の企画に関連する研究発表として、経済地理学会関西支部例会（2014年1月11日、神戸大学梅田インテリジェントラボラトリ）での「中

国における都市の変貌」をテーマとするものがあった。報告者は、季増民（椋山女学園大学）と王承云（上海師範大学）であった。

王は、「中国における新たな都市化と政策について」をテーマに発表をおこなった。その中で、沿岸部と内陸部の格差を解消するための国土の総都市化に関する国土計画について論究し、沿岸部にあっては住宅投資抑制のための持家制限、国土の東西南北の連絡を改善するためのインフラストラクチャーの整備について示した。

一方、季は「周辺から見た大都市圏の変遷－中国の事例から」を論題に、大都市圏への人口集中との関連において、若者層の教育機会、特に高等教育のそれに関してふれられた点は興味深かった。季は上海師範大学の卒業生とのことで、本学との学術交流の一層の活発化にも貢献願えるとの感触を得た。さらに、上海師範大学は新制移行後60周年を迎えるとのこと、その意味からの今回の企画の位置付けもある。

3. 都市を素材に大学教育

われわれの大学では、学生がこれまで以上に大学における系統的な学修を意識して日々の学習に取り組めるよう指導を強化している。そのための学生と教師とで構成する学びの集合体をコモンズと呼んでいる。そのコモンズの1つに、「都市文化」を冠するものもある。文化現象に対して都市を素材に、社会学、歴史学、芸術学の分野から攻究するものである。

奈良県は南部に広大な山間地域を擁する。その一方で奈良市は、大阪市や京都市と1時間以内で連絡できる位置にあり、関西の大都市圏機能の一翼を構成している。そこに立地する奈良県立大学は、都市研究を深化させ、その成果を山間地域に波及させるための格好の立地条件にある。この点を教育体制に反映させるために、従来の「地域」と「観光」を括りとするものから一歩踏み出したのである。

従って、上記のコモンズに限らず、他の3コモンズである「観光創造」、「コミュニティデザイン」、「地域経済」もその学習活動の対象として都市を念頭においている。既に述べたように、この特集は前回のものとの接点を「都市研究」という次元で有しているが、執筆者は一新している。また、このテ

マにアプローチされる方々の専門分野も様々である。このことは都市そのものの有する多様性を象徴したものといえる。

その意味においては、今回の特集企画は、奈良県立大学にとっては新しい教育課程に移行した初年度における教育研究活動の地歩を確認するものでもある。そしてわれわれは、コモンズにおいて「都市研究」の未来形を模索することになる。

文献

- 井原緑 (2012) : ランドスケープの変貌 - 「国際園芸博覧会」の自然観 - . 奈良県立大学「研究季報 (地域創造学研究 X II)」第22巻第2号, 23~68頁.
- 入江泰吉記念奈良市写真美術館編 (2011) 『入江泰吉の原風景/昭和の奈良大和路/昭和20~30年代』光村推古書院.
- 小松原尚 (2012) : インバウンドの拡大と産業観光. 奈良県立大学「研究季報 (地域創造学研究 X II)」第22巻第2号, 23~68頁.
- 小松原尚 (2013) : 入江泰吉による風景写真の今. 「お茶の水地理学会会報」第63号, 17~25頁.
- 千住一 (2012) : 日本統治下台湾・朝鮮・満洲における観光に関する研究動向. 奈良県立大学「研究季報 (地域創造学研究 X II)」第22巻第2号, 83~96頁.
- 田辺征夫 (2010a) : 平城京の時代. 田辺征夫・佐藤信編『平城京の時代 (古代の都2)』吉川弘文館, 1~21頁.
- 田辺征夫 (2010b) : 奈良の都を復元する. 田辺征夫・佐藤信編『平城京の時代 (古代の都2)』吉川弘文館, 1~21頁.
- 長坂政信 (2008) : 地図は語る. (所収 高橋伸夫ほか編『改訂新版ジオグラフィー入門』古今書院, 34~37頁).
- 町田章ほか編 (1975) : 平常宮発掘調査報告VI平城京左京一条三坊の調査. 奈良国立文化財研究所「学報」第23冊, 128~164頁.